

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 池田 和臣 いけだ かずおみ

本論文は『源氏物語』の豊かな表現世界を、池田氏独自の分析手法を駆使して解明したものである。論文の構成は、『源氏物語』の第一部から第三部に対応させた第Ⅰ部から第Ⅲ部と、『寝覚』『狭衣』等の平安後期物語における『源氏物語』の引用を論じた第Ⅳ部とから成るが、本論に先だって、氏自身の問題意識と分析方法を研究史上に位置づけて明らかにした「序にかえて」を置いている。

池田氏の研究は、引歌や話型等の引用の諸相と、中世源氏学以来「草子地」と呼び習わされてきた語り手の批評的言辭に見られるようなこの物語特有の語りのあり方を中心とした、精緻な表現分析である。とくに物語がそれ自身の先行部分を引用する物語内引用の分析は、氏の研究の最も独創的なところであり、数々の重要な新見を生み出している。

たとえばⅢ-11「竹河巻と橋姫巻試論」では、竹河巻で、薫がその傍観者となる蔵人の少将の恋の物語に、薫の実父柏木の自滅的な恋の物語が引用され、さらに橋姫巻で、薫自身の宇治の大君に対する恋の物語に再度柏木物語の引用が見られることを指摘し、こうした物語各部の有機的な主題連関を通して、柏木の破滅的な情念を内に秘めながら逡巡する優柔な認識者という、物語史上画期的な薫の人物造型が必然化されているとして、古来作者別人説さえ唱えられてきた竹河巻の主題的位相をも併せて明らかにしている。

また12「浮舟登場の方法をめぐって」は、物語の大きな流れとしては浮舟を登場させる役割を担わされた中君について、その物語の展開を阻害しかねないほどに中君自身の苦悩の描写が深刻化してゆくのを、しばしば突き放すような草子地の介入によってかろうじてくいとめている様相を指摘して、『源氏物語』の語りの特徴を明らかにしている。

さらに第Ⅲ部の最後に置かれた16『源氏物語』の言語状況」は、本論文の源氏論全体を統括する論であるが、光源氏・夕霧・薫・手習巻の中將といったそれぞれに異なる性格を付与された男君たちが、実は女君に対する求愛においては類型的な表現を繰り返しているのに対して、女君たちの拒否が次第に峻厳になってゆくことを明らかにし、この物語における主題の反復と深化の様相を鮮明に浮かび上がらせている。

神話的元型や継子いじめの話型の引用を論じた第Ⅰ部では、その元型や話型の捉え方にやや曖昧が見られ、また第Ⅱ部以下の諸論においても、やや深読みかと思われる箇所もなしとしないのであるが、論文全体としては、語りと引用の精緻な分析によって、主題の有機的な連関・照応を地下水脈のように張りめぐらしながら生成する『源氏物語』の表現世界のありようを克明に浮かび上がらせた功績はきわめて高く評価される。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。